

私の一冊

歯科衛生学科 海老名和子 先生

三浦綾子著 『塩狩峠』

小鹿図書館 : 913.6/Mi 67 (新潮文庫)ほか

この本は、私が高校二年の時に購入して読んでからなんと30年間、9回の転居を共にし現在も自宅の本棚に収まっています。(濱口先生の「私の一冊」と出だしが似ていますが、本を所有している年月では私の方が勝っています。)

高校生の私が主人公の生き方、死に方に感動と衝撃を受け、“生きる”ことの意義を改めて考える機会となった小説です。その時以降読まずとも手放すことのできない一冊となりました。最近感動することもないという方、澄み切った空のように晴れ晴れとしたい方に是非お勧めしたい心に染みる一冊です。

物語は、主人公永野信夫が十歳の時から始まります。時は明治、信夫は生まれた直後に母を亡くし銀行勤めの温厚な父と厳格な祖母に育てられました。しかし実は、母は「ヤソ」であるため祖母に疎まれて家を出て行ったのでした。やがて祖母が亡くなり母、妹が家に入り家族4人の生活が始まりました。共に生活をしていく中で信夫は、宗教観の違いを感じたり、母が「自分よりもヤソを選んで出て行ったのだ」という思いを抱いていました。その後信夫が大学受験の前に父が亡くなり、大学進学を断念し裁判所で働いていましたが、小学生の時の友人吉川の住む北海道に移り住み鉄道会社に勤めるようになりました。札幌では、片足が不自由だが美しく心のきれいな吉川の妹ふじ子が、結核に冒され闘病生活を送っていました。信夫は、明るく振る舞うふじ子に思いを寄せ、闘病生活の中でクリスチャンになったふじ子や町で出会った伝道師の生き方に魅せられて徐々にキリスト教を受け入れるようになっていきました。やがて長い闘病生活を経てふじ子の病状も回復し、晴れて二人は結婚することが決まりました。そして結納の日、ふじ子の待つ札幌に向かう列車に乗った信夫。宗谷本線・和寒駅を発車した列車が、塩狩峠にさしかかり勾配を上っている途中で、最後尾の連結器が外れ信夫の乗った客車が後退し始めました。信夫は座席から飛び出し、連結部のハンドブレーキに手を掛けました。列車はスピードを緩めていきますが止まりません。そして信夫は、とっさの判断で線路に身を投げ出して自分の身体で客車を止めました。信夫は殉職し、乗客は全員救われました。

これは明治42年2月28日北海道塩狩峠で実際に起きた列車事故で、線路に身を投げ出して列車を止めて殉職した旭川在住の敬虔なクリスチャン長野政雄氏のことを聞いたクリスチ

ヤンである作家三浦綾子氏が、自身のキリストへの思いを込めて物語として世に出した作品です。

高校生の私は、この本を読んで自分が長いこと待ち望んだ幸せを目前にして、他人のために身を投げ出して死ぬ、ということは何のためらいもなく行った主人公に衝撃を受けました。また不自由な身体だけでなく肺病、脊椎カリエスと次々に病に襲われながらも、可憐に明るく前向きに生きるふじ子に対して畏敬の念を抱きました。さらに後書きでこの小説が実際の事故に基づいているということに驚きました。そしてこのような人たちが信仰していた「キリスト教」に非常に興味を持ちました。また作者である三浦綾子さん自身が、結核、脊椎カリエス、パーキンソン病、癌等闘病生活を送っていたこと、この小説も夫の三浦光世氏の協力で口述筆記されたことを後に知りました。

文中に聖書の格言がいくつか出て来ます。「義人なし、一人だになし」クリスチャンの母「「菊」は、信夫の「この世に正しい人は一人もおりませんか。」との間に「いないでしょうね。」と答え、更に「自分を偉いと思う人間に、偉い人間はいなませんよ。」ときっぱりと答えています。また物語の後半信仰を深めていく信夫は、札幌の鉄道会社の同僚で不祥事を起こした三堀に対し「己のごとく汝の隣を愛すべし」を守り、三堀に対してここまでするのかというほど親身に接しました。その後三堀から反感をかうことになっても、それは自分が至らないための戒めであると受け止めています。

この本を読むたびに日常にフラフラと流されている自分が恥ずかしくなります。この本を読むことで自分自身の人生の意義を考えるきっかけになるのではないのでしょうか。実際に長野政雄氏の事故を機にクリスチャンになった人も多くいたと書かれています。この小説を読んで入信した人も多いようです。感動したにもかかわらず残念ながら私は入信には至っていませんが、ここまで純粋に信じるものがある人々を羨ましく思っています。

私は何のために生きているのか？自分は人のために死ぬるだろうか？常に謙虚でいることができるだろうか？

日常生活に疲れたら、是非一度読んでみてください。